

商工省は存在していないので通産省ではないのだろうか。的はずれの書評になったことを恐れつつ筆をおく。
(柿本典昭)

David Herlihy et Christiane Klapisch-Zuber *Les Toscans et leurs familles, une étude du catasto florentin de 1427* (トスカナ人と家族, 1427年フィレンツェ資産台帳の研究) Presses de la Fondation Nationale des Sciences Politiques. Paris, 1978, 703頁

本書については、すでに中世史家の清水広一郎氏が詳細な検討¹⁾を発表しておられるし、外国においても、多くの専門誌がこの注目すべき研究成果を取り上げている²⁾。すでに4年前に出版され、これだけ注目されている本書に関して、屋上に屋を架すに類するような紹介を試みるのは、他でもない歴史地理学の分野において、本書の意義の認識がほとんどなされていないからである³⁾。

ここで仮に資産台帳と訳しておいたのは *catasto* のことであるが、これは1427年の法律によりフィレンツェのコムーネによってなされた人口および戸主の資産状況の調査であって、首都フィレンツェおよびピサ、ピストイア以下フィレンツェの直接支配下にあるすべてのコムーネの都市部および農村部をおおうもので、この事業のための経費の計上は1435年に至るまでなされているが、カタストの大部分は1430年までに完成したと考えられている。カタストの直接の目的は、ミラノとの長期にわたる戦争によって疲弊した都市国家の財政を建て直すための税制改革であったが⁴⁾、それまでの農村における直接税のための台帳作成などの伝統を踏まえ、またベネチアにおける先例をも一部見習ったこともあって、このカタストは当時のものとしては、実に精度の高いまた情報量の豊富なものであった。

この膨大なカタストは、フィレンツェおよびピサの古文書館にほぼ完全な形で保存されているが、これまでのところ局地的、部分的に利用されていたにすぎなかった。すなわち、E. コンティによるフィレンツェ農村部における折半小作制形成史の研究や、本書の著者のひとりであるハーリーによるピストイア史の研究などがそれであったが、すでに1966年からこの膨大なデータをコンピューターに入れて処理する計画が、フランス・アメリカの共同作業という形でたてられた。フランス側で中心になった機関は

高等研究院(EPHE)で、継続的に国立科学研究中心(CNRS)からの研究補助金を得たし、アメリカ合衆国の側で中心になった機関はウィスコンシン大学で、様々なファンドから継続的に研究補助金を得て、結局約10年を要してこの作業が完成し、磁気テープは、ウィスコンシン大学とEPHEの第6部が保存することになった。

今回出版された本書は、まず、このカタストの性格の吟味に始まり、カタストの限界をも十分に指摘した上で、データをコンピューター化する際の原則を説明している。著者達が指摘しているように年齢、特に男子のそれに関しては、史料としての信憑性に問題があるし(たとえば40才の人口数は39才のその50倍である)、またカタスト作成以後の追記・訂正は、極めて部分的かつ恣意的であるので、このデータによって可能な分析は静態的な側面が主になり、動態的な側面の分析はかなり限定されたものになる。これらの限界にもかかわらず、年齢・経済活動の状態をも含めた人口と、各家族ごとの資産状態とを、地域別および社会階層別分析が可能のようにコード化していくという基本方針は正しく、今後の豊かな研究成果を期待させるものである。また本書の第2部において、カタスト作成の背景になったフィレンツェまたはトスカナ社会の行政・政治状況・民衆の生活慣行などが記述されているが、カタストのデータから知り得ることを分析・吟味するに際しての前提として、この部分に著者達の姿勢が明確に打ち出されている。

人口と資産と題された第3部、人口学的行動様式と社会環境と題された第4部、家族の姿と題された第5部が本書の約3分の2を占め、この部分はいずれもコンピューターによるデータ処理によって始めて明らかにされた結果の分析である。今後このデータを用いて、多くの学者がさらに多くの研究を発表することであろう。本書は、カタストによって知られるルネサンス期トスカナ社会の、いわば基本的なイメージを提示したものであるということができよう。

歴史地理学的な関心からすればまず第1に、イタリアルネサンス文化の中心であったフィレンツェ領の他の地域と比較しての社会的特色、第2にはこのフィレンツェ国家の空間組織、特に諸コムーネ間、および都市部と農村部との間の諸関係が、本書によってかつてないほど明瞭に示されたということが重

要である。もちろん、この2つの側面は密接に関連している。たとえば、人口に比して富が圧倒的にフィレンツェに集中しているし、特に公債(monte)は99.7%がフィレンツェに集中している。フィレンツェと他の都市について、動産・不動産・公債所有のローレンツ曲線を比較すると、フィレンツェ市民の公債に関するものが集中度が最も高く、フィレンツェ市民の不動産に関するものが最もゆるやか(均等分配線に近い)である。このことはまさに、トスカナ全体の土地所有者が、かなりフィレンツェに集中していたというトスカナ社会の特色を示すものであろう。また人口ピラミッドは、このカタストのデータからでも、人口動態についていくつかの興味ある事実を示している。トスカナ全体として老人人口の比率が極めて高く、その値は現在の工業化社会のものに近い。同時に若年(19才以下)人口の比率も高く、その値は先進工業国の産業革命初期のものに近い。これはひとえに14世紀末にトスカナで猛威をふるった黒死病流行の痕跡である。各都市および都市部と農村部の人口ピラミッドを、家族構成の地域別および階層別相違との関連で比較すると、富裕階層(子供数が多い)がフィレンツェをはじめとする主要都市に集まっていたのみでなく、ピサ周辺丘陵部、アルノ川下流域、山地の農民の小土地所有地帯は、若年層を都市中心に流出させていたことも明らかになるのである。

ルネサンス期トスカナの空間構造の解明は、本書全体を貫く重要なテーマとなっているが、それはまず視覚的に多数の見事なコンピューター・マップによって示されている。主要都市の経済的繁栄の基礎として、やはり手工業があったことが明らかになるが、農業に関してまず注目しなければならないのは、直接経営農地帯と折半小作農地帯とのコントラストであろう。そしてこのカタストの時点で、後者は最も集約的な土地利用を可能にする新しい土地制度として、フィレンツェを中心に拡大が開始されていたことが知られる。したがって折半小作農の分布は、19世紀から20世紀前半までのもの⁵⁾とはかなり違っている。カタストが資産の調査を目的にしているため、牧畜に関しては地域的相違がかなりよく示されるが、耕作部門に関しては空間構造は明らかにされていない。

人口に関するデータは、その地域的特色が実に詳細に示されている。中には男寡率や寡婦率の分布の

ように、確かに地域的差異が大きく興味をそそることもあるが、本書における説明からではどうも納得できないこともある。しかしたとえば、家族構成員数、既婚率と資産状態などの相関係数、これらの係数の空間的分布状態が、これほどはっきりと示され分析が加えられているのを見ると、今さら驚いても始まらないが、コンピューターの情報処理能力の威力を痛感する。

このカタストを史料として検討するとき、当然のことではあるが、現在インプットされていない部分で重要なものがまだまだあるであろう。しかし、数人の研究者が古文書館で一生埃にまみれてもできなかった作業を、コンピューターがしてしまったことは確かである。だが本書の成功は、あくまでデータのインプットに先立つ史料批判、計量化されたデータを説明する際の、著者達の科学的態度と史観とによるものであることを忘れてはならないであろう。

(竹内啓一)

- (1) 清水広一郎「十五世紀トスカナにおける市民とその資産—Herlihy-Klapisch “Les Toscans et leurs familles” に関して」『一橋論叢』第84巻第6号、1980、63～70頁
- (2) Braunstein, Ph. “La Toscane dans le premier tiers du XV^e Siècle : informatique et paysage social” *Annales E.S.C.* 35^e Année No. 1, 1980, pp. 42～51 の小論のほか、Malle H.M. による *The Economic History Review* Vol. 32, No. 2, 1979, pp. 290～291, De Madalena, A. による *Rivista Storica Italiana* Anno XCII Fasc. I, 1980, pp. 250～253, Kent, F.W. による *Speculum* Vol. 55, No. 1, 1980, pp. 129～131 などがある。
- (3) これは歴史地理学なるものの理解に関する根本的問題に関することであるが、歴史地理学を過去における空間組織の復元—すなわち時間という次元を相対化する地理学—と考えるならば、本書の意義は絶大である。しかし、現在の空間組織に影響をもつ歴史的諸事実の分析という、現在でもかなり広範に支持されている立場に拠るならば、本書は純粋に歴史学の分野における業績になってしまう。地理学を、空間組織の分析に関する科学であると理解すれば、歴史地理学に関して前者の理解をもたざるを得ないことは明らかである。
- (4) 税制改革としてのこのカタストの性格につい

ては、清水広一郎『イタリア中世都市国家研究』岩波書店、1975、249～312頁を参照。

(5) 19世紀から今世紀前半までのトスカーナの折半小作制については、次の論稿で考察を加えてお

いた。竹内啓一「トスカーナ折半小作地帯の最近における変貌—ヴァル・ディ・キアナにおける事例研究—」『社会学研究（一橋大学）』第21号、1982、193～258頁